

【研究ノート】

日本幼児教育史再考

——大正期の竹中幼稚園の保育内容について——

金子 晃 之

Reconsidering the History of Early Childhood Education in Japan

—Childcare Content of Takenaka Kindergarten in the Taisho Era—

Teruyuki KANEKO

はじめに

日本幼児教育史再考という課題の下、前々稿では明治の幼稚園黎明期を辿り、黎明期の幼児教育の特性から現れる研究課題の視点、またフレーベル幼稚園と恩物の幼稚園史における研究課題の視点を整理した。前稿では明治から大正にかけて私立幼稚園が増加する軌跡を概観し、教育史においてほとんど取り扱われてこなかった岡山倉敷の竹中幼稚園の胎動を描き出した。本稿はその続編として、竹中幼稚園の胎動をさらに詳細に描くこと、竹中幼稚園の保育内容を再現し、大正期の幼稚園史の流れの中に位置づけることを目的とする。

1. 開設時の竹中幼稚園の概要

岡山県倉敷にある竹中幼稚園の開設当初の大正期の概要は、1925年（大正14年）の『竹中幼稚園の栞』に依拠すると以下のようにまとめることができる。

- | | |
|-------------|---|
| 大正11年9月1日 | 倉敷町新川の倉敷教会假会堂に於いて開設
園長 竹中光子 ⁽¹⁾ （東京玉成保姆養成所卒業）
保母 河野淑子（東京玉成保姆養成所卒業） |
| 大正12年3月19日 | 旭町倉敷基督教会新会堂へ移設 |
| 大正12年3月20日 | 旭幼稚園設立認可 |
| 大正13年4月7日 | 保母1名増員 赤木定子（東京玉成保姆養成所卒業） |
| 大正13年10月13日 | 園名を竹中幼稚園へ変更 |
| 大正15年1月24日 | 代用保母として山本辰枝 |
- （竹中幼稚園1925: 4-5）

年度	園児				在職保母	在職補助
	入園	事故退園	永眠	保育終了		
大正11	30	4	1		2	1
大正12	25	5		17	2	1
大正13	33	8		26	3	1
大正14	36	4	1	26	3	2
大正15	43	8		36	3	2

(竹中幼稚園1925: 6) 及び (竹中幼稚園1932: 6) を参考にして筆者がまとめたもの

*上記の「事故退園」は資料の通り記載したが、「自己退園」の誤記だと推測する。

保母は3名とも同じ学校出身である。このことが当時の幼稚園の業には、「同じ気持ちで創業の基礎を作り上げます為に、只今の處、同じ學校出身で、同じ信仰を持つた者達が、全力を盡して、事に當つて行き度いと、希つて居ます」とある (竹中幼稚園1925: 5)。

また園の主意については、以下のようにある。

「若し不注意で、取扱いを誤りますと、折角神様から興へられて居る、貴い生命が、芽生へるべき時に芽生へないで終る事にもなります。其處で、それを導いて行く上には、精神方面にも、肉體方面にも、細心な注意と、不断の祈りのうちにキリストの愛に基づきまして、育み、おほし立てねばならぬと存じます。まことに無垢な小さな魂を、汚さず、傷けず、素直にのびのびと育てます事は、人間の智慧と力丈では、とても及ばぬと存じますが。神様の官き御慈愛に縋り、其御力にお頼りして、努力致します時に、必ず相當な御報ひのある事を信じずに居られませぬ。」(竹中幼稚園1925: 3)

ここからは竹中幼稚園の子ども観が窺える。神から授かった生命を導くにはキリストの愛に基づいて育てることが必要であり、神の慈愛にすがりながら努力をするときに報われる存在だとする子ども観である。

次に、規程については以下のようにある。

保育時間 10月1日～3月30日 9:00～13:30 弁当持参

4月5日～9月30日 8:30～11:30

休日 日曜日、土曜日、祝日、大祭日

夏季休園 7月25日～9月4日迄

冬季休園 12月23日～1月10日迄

春季休園 3月21日～4月4日迄

保育料 1円50銭

入園料 1円

入園期日 毎年4月5日 ただし欠員あるときは臨時に受け付ける（竹中幼稚園1925: 7-8)

保育時間は、秋から冬にかけて4時間半であり、春から秋初めにかけては3時間であった。保育日数は、4月5日～7月24日で約15週、9月5日～12月22日で約15週、1月11日～3月20日で約10週であった。

日本の幼稚園に関する初めての法的規定は、1899年（明治32年）「幼稚園保育及設備規程」によって制定された。これは、幼稚園教育の目的、内容、施設設備等を規定したもので、1日の保育時間を5時間以内、保育士1人の保育児数を40人以内、1幼稚園の総園児数を100人以内、保育項目を「遊戯」「唱歌」「談話（説話）」「手技」とした。

そしてこの規定内容が改正されたのが、1911年（明治44年）の小学校令施行規則の改正であった。この改正で1900年（明治33年）の第三次小学校令の際に制定された小学校令施行規則のいくつかが改正された。主なそれは以下の通りである。

第二百二条 保育ノ時数ハ一日五時以下トス前項ノ時数ニハ食事時間ヲ包含ス
(明治33年)

第二百二条 保育ノ時数ハ管理者又ハ設立者ニ於テ之ヲ定メ府県知事ノ認可ヲ受クヘシ
(明治44年)

第二百六条 幼稚園ノ幼児数ハ百人以下トス 但シ特別ノ事情アルトキ
ハ百五十人マテニ増スコトヲ得 (明治33年)

第二百六条 幼稚園ノ幼児数ハ百二十人以下トス 但シ特別ノ事情アル
トキハ約二百人マテニ増スコトヲ得 (明治44年)

このようなところから、当然ながら竹中幼稚園の保育時数は、当時において規程内のものであった。また年中行事については、以下の通りである。

- 1月1日 新年祝賀式
- 1月上旬 新年開園式
- 2月11日 紀元節祝賀式
- 3月3日 雛祭
- 3月中旬から下旬 保育終了式
- 3月下旬 在職中の保母 毎年母校の玉成保母講習会に出席のため、上京
- 4月5日 入園式
- 5月5日 端午祭
- 7月下旬から8月末日 夏季休園
- 9月上旬 秋季開園式

12月下旬 年末休園式 クリスマス祝会

母の会 一学期毎に1回開催

保育終了児旅行 3月学年末休園中 岡山後樂園に旅行する（竹中幼稚園1925: 7）

紀元節とは、神武天皇が即位した日を祝日としたもので、1873年（明治6年）に制定されたものである。竹中みつの『個人日記』によれば、1924年（大正13年）2月11日（月）に、午前9時半から幼稚園にて紀元節の式を行っている。

雛祭については、竹中みつの『個人日記』によれば、1924年（大正13年）3月3日（月）に、昼に畳の部屋で雛人形を前に手作りのお寿司を配り、差し入れのお菓子も配り、倉敷教会の田崎牧師の奥様も参加し、一緒に会食をし、子どもたちが大喜びであったとある。

端午祭は当時、祝日ではなかった。1925年（大正14年）5月5日（火）の竹中みつの『幼稚園日記』には次のようにある。

「今日ハ五月五日デ端午ノ節句ヲシテ社交室デ子供達ト一緒ニオ菓子ヲ食ベテ遊ブ。皆大
崑ビダツタ」

翌年の1926年（大正15年）5月5日（水）の竹中みつの『幼稚園日記』によると、竹中幼稚園に若竹の園の子どもが来訪し、お菓子も配られ、一緒に弁当を食べ、遊戯を行い、子どもたちが大喜びしていたとある。

2. 会集

前述したように1911年（明治44年）の改正によって、保育時数と収容定員が緩和された。これは、大正期の幼稚園と託児所における保育需要の大きな増加に対応するためだった。需要の増加と共に大正期の幼稚園は、保育内容を向上させたと研究史上解釈されている。

村山貞雄によれば、大正期の意欲的な幼稚園は、保育4項目に郊外保育、園芸、観察を加え、キリスト教幼稚園はお祈りや聖書の話を加え、そして保母が互いに研究会を開いて向上を図り、律動遊戯という新しい試みが実を結んだとしている（日本保育学会1969: 52）。

そうした大正期の保育項目の中に、竹中幼稚園の特徴を以下に整理していくことにしたい。

1925年（大正14年）の竹中幼稚園の幼稚園日記によれば、会集の内容が、①奏楽、②祈祷、③讃美歌、④挨拶、⑤暦、⑥歌、⑦話となっていた。その後には、⑧律動、⑨遊戯、⑩自由遊び、⑪仕事が組まれて行われた。（この番号については、本稿において分かりやすく整理するために筆者が記したものである）

1899年（明治32年）「幼稚園保育及設備規程」における保育項目は、「遊戯」「唱歌」「談話（説話）」「手技」であった。これを竹中幼稚園に当てはめると、「遊戯」にあたるものが⑧律動、⑨遊戯、⑩自由遊びであり、「唱歌」が①奏楽、⑥歌であり、「談話（説話）」が④挨拶、⑤暦、

⑦話であり、「手技」が⑪仕事になると考えられる。竹中幼稚園ではこの⑪仕事を、1925年（大正14年）7月22日（水）以降、手技、恩物という語に置き換えるようになっていた。②祈祷、③讃美歌は、キリスト教幼稚園独自の内容であった。

竹中みつによる『會集』という名称の手書きのノート（年代不明）（以下本稿では『會集』と記す）があり、前述の会集の内容①～⑦が執行順序として決められていた。

村山貞雄によれば大正期の保育内容については、大正14年に文部省が行った「全国幼稚園ニ関スル調査」の保育項目に関する調査結果がある。以下がそれである。

全国幼稚園保育項目ノ種類

	園数	遊戲	唱歌	談話	手技	会集	言語 訓練	書方	画方	観察	園芸	運動	郊外 保育	数方	其ノ 他
師範付属	21	21	21	21	21	—	—	—	4	7	—	1	2	—	2
市町村立	304	304	302	302	302	6	—	5	53	6	9	3	13	2	36
私立	608	608	608	607	597	9	1	4	57	26	22	9	27	6	27
計	933	933	931	930	920	15	1	9	24	61	31	13	42	8	164

其ノ他ニ屬スルモノノ中主ナルモノ下ノ如シ 一、行儀 二、英語 三、動物飼育 四、食事 （日本保育学会1969: 52）

*上記の表は、資料中の縦長のものを横長のものへと筆者が訂正したものである。

調査結果では、保育の4項目が多く行われているのに対して会集を行っていた幼稚園は非常に少ないということになるが、村山貞雄は、明治期に全盛だった会集が大正期にも調査結果よりも多く行われていたと主張しており、キリスト教幼稚園では「お祈り」や「聖書のお話」を重視しており、会集が広く行われていたと主張している（日本保育学会1969: 53）。

また大正10年の岡山市立幼稚園では、保育項目を7項目とし、会集、園芸、遊戲、談話、手技、唱歌、観察としていた（日本保育学会1969: 53）。

村山貞雄によれば会集は、明治期に談話や手技と並んで重視され、会集を行う遊戲室も重視されたが、大正期になると倉橋惣三の影響もあり、大勢の子どもを1カ所に集めて画一的に行うことに反対する人々が現れ、幼稚園関係者の中で論争が起こっていたという（日本保育学会1969: 72）。

そうした中で竹中幼稚園は、会集を毎日行っていた。『會集』の中には、「會集ノ意義」として「會集ハ幼稚園ニ於テハ取り去ル事能ハザル最モ大切ナル時間ナリ。殊ニ朝ノ初メニ於テ行フバ實ニ考ヘラレタル事ナリ」とされ、朝の遊びを終えた後の子どもは必然的に興奮状態にあり、直ぐに別の活動に入ることが難しいとされ、次のようにある。

「ココニ於テ彼等ヲ先ヅ一室ニ導キ入レ而シテ美ハシキ高尚ナル音楽ヲ奏スル時ハ幼児ノ散漫セル精神ハ沈静ニナリ内ナル清キ宗教心ハ自ヅト抽出サレルノdeal。又保姆ト互ニ話ノ交換ヲナシテ幼児ノ内ニアル思ヲ充分ニ発表セシメテ幼児ノ有スル善良ナル点ハ之ヲ益々伸バス様助カス。互ニ挨拶ヲナス時ニハ礼儀ノ重ンズベキフヤ他人ヲ尊敬スベキ事等ヲ自ラ確知スルニ至ル。歌フ種々ナ歌ニ依リテ萬事萬物ヲ知り又自然界ト自分トノ關係ヲ

知ルニ至ル。多クノ他ノ人々ト一ツニナリテ行フ事ニ依リテ自分ヲ他ト比較ナシテ他ヨリ云ハレズシテ自ヲ反省ス。自然ニ社交的気分ヲモ養成スル事ヲ得ルナリ。カクテ幼児ハ次第ニ見聞ヲ広メ眠レル精神ヲ段々ニ醒マシ行キテ未知ノ國ヨリ既知ノ國ニト進ミ行ク事ヲ得ルナリ。以上ノ如キ意味ニ於テ會集ハ最モ必要ナルモノナリ。」

これをまとめると、美しい高尚な音楽の中で宗教心が喚起されること、保母との対話の中で子どもの思いと善良さを支援できること、挨拶をし礼儀を重んじ他人を尊敬すること、歌を歌うことから万物を知り自然と人間との関係を知ること、他人と一つになり行動することで自他を比較し自らを反省できることから会集は最も必要なものとされている。

大正期に会集の意義が問われる中で、竹中幼稚園では子どもの成長という点から会集を重視していたのである。

3. 会集の詳細

竹中幼稚園の『會集』によれば、その目的と概要は次の通りである。

(1) 奏樂

目的は、「1 精神的ノ修養」「イ 心ヲ静カニス」「ロ 敬虔ノ念ヲ養フ」「ハ 高尚ナル心ヲ養フ」「ニ 愉快ナル気分ヲ作ル」、「2 多クノ幼児ヲ一致セシム」「3 美シキ音楽ニ對シテ幼児ハ我ヲ忘レテ耳ヲ傾ケ自然ニ律の音色ヲ覚ユ」「4 時節ノ気分ヲ作ル……時ニ應ジテ気分ヲ作り得 例……炎暑ノ頃 涼シキ『小川ノササヤキ』又ハ『蛩』等ノ曲ヲ聞ク時ハ自然ニ涼シク感ズ」とある。

(2) 祈祷

目的は、「1 人間以上ノ偉大ナル力ノ在ル事ヲ知ラシム……即チ神ト自分トノ関係ヲ知ラシム」「2 日々受ケツツアル恩恵ヲ感謝セシム」「3 我々ハコノ神即自分以上ノ偉大ナル力ニ依ラザレバ決シテ生クル事能ハザル事ヲ知ラシム」とある。

注意としては、「1 保母自ラガ感謝ニ溢レ神ニ對スル敬虔ノ念ガ満チ満チテ居ル事大切ナリ」「2 形式的ナラズ眞心ヨリ出ヅル祈ナラザルベカラズ」「3 言葉ハ完全ニシテ而モ幼児ニ理解シ得ル言葉ヲ用フ」「4 具体的ニ祈ル事……例……『雨降ラバ草木ハ沐浴スル事が出来獸類ヤ鳥類ハ飲ム水ガ出来テ喜ブ』」「5 他ノ子供ニ邪魔ニナラ又範圍ナラバ目ヲ開ケタリ又落付カザル子供アリテモ其ママニナシ置ク方ヨシ。強イテ目ヲ閉ジサセタリ静カニサスハ良カラズ。若シ餘リ迷惑ニナル時ハ他ノ室ニ連レ行キテ静カニナルマデ置ク」「6 長キ時間ハ禁物」とある。

(3) 讃美歌

目的は、「1 神ヲ讃メ頌ヘル」「2 敬虔ノ念ヲ養フ」「3 言葉ヲ以テハ達シ得又マデ深キ幼児ノ内心ニ入りテ宗教心ヲ引起ス」とある。

注意としては、「1 幼児ニ理解シ得ベキ歌詞ト容易ナル譜トヲ用フ」「2 幼児ニ理解シ得ル範囲ニテ高尚ナモノヲ撰ブ」「3 具体化サレタルモノナルベシ」「4 單純ナモノヲ撰ブ」とある。

(4) 挨拶

目的は、「1 機嫌ヲ伺フ」「2 礼儀ヲ守ラセル」「3 他人ニ対スル尊敬心ヲ増サシム」「4 友情ヲ暖メル」「5 善良ナル習慣ヲ養フ」「6 一致ノ精神ヲ養成ス」とある。

注意としては、「1 丁寧ニサセル」「2 姿勢ヲ正シク保チテサセル」「3 一同揃ツテサセル」とある。

(5) 暦

目的は、「1 時ノ觀念ヲ保クス」が「イ 一日ガ七ツ集リテ一週トナル」「ロ 一週ガ四ツ集リテ一月トナル」「ハ 一月ガ十二集リテ一年トナル」とあり、「2 責任觀念ヲ養成ス……二三分トテ尊重シテ大切ニ用フルニ至ル」「3 何事ヲ為ス場合ニ其時ヲ外シタル為ニ自分一人ノミナラズ他人ニモ迷惑ヲカクル事アリ」とある。

(6) 歌

目的は、「1 本能ヲ満足セシム」「2 自然ト親シマシム」「3 時候ノ気分ヲ味ハシム」「4 一致ノ精神ヲ養フ」「5 言葉ニテハ表現出来ヌ事柄ヲ歌ヲ以テ云表ハス」「6 身体ヲ健康ニナス為……声ヲ適宜ニ出セバ衛生ノ為ニヨシ」「7 発音ヲ正シクセシム」「8 声ヲ美シクセシム」「9 聴覚ノ発達ヲ助ク」とある。

種類としては、「1 特別ノ日ノ歌」「2 氣象ノ歌」「3 動物ノ歌」「4 植物ノ歌」「5 雑ノ歌」とある。

(7) 話

目的は、「1 幼児ノ本能ヲ満足セシム」「2 経験ノ交換……幼児各々が持ち来ル経験ヲ高メ深メ廣メテ未知ヨリ既知ニ進マシム」「3 幼児ノ経験ヲ自由自在ニ発表ナサシム」「4 話ヲ通シテ過去、現在、未来ヲ知ラシム」「5 多クノ言葉ヲ知ラシム」「6 話ヲ通シテ自然物ヲ知ラシム」「7 世界ノ各国ヲ紹介ナシテ幼児ニ知ラシム」「8 自分ト他ノモノトノ関係ヲ知ラシム」「9 全テノモノニ対シテ同情心ヲ持タシム」「10 幼児ノ持来ル各々別々ナル経験ヲ連絡ヲツケル」「11 幼児ノ家庭ヲ知ルフヲ得」とある。

方法としては、「1 幼児ニ質問ナシ乍ラ話ス」「2 實物ヲ示シテ話ス」「3 絵画ヲ示シツツ話ス」「4 實物ヲ幼児ニ持タセ或ハ觸レサセテ知ラシム」「5 話ノ間ニ歌ヲ入レルモヨ

シ」「6 説明為スニ必要ナ手眞似或ハ口眞似等ハ必要ナリ」とある。

注意としては、「1 保姆ハ自分ヨリ最モ遠キ所ニ居ル幼児ニ聞エル範圍ノ明瞭ナル声ヲ用フ」「2 自然ノ声ヲ出タシ而モ出来得ルカギリ美シキ声ヲ用フ」「3 幼児ニ解リ得ル完全ナ言葉ヲ用ヒ発音ヲ正シクス」「4 消極的ニアラズ凡て積極的ニ話ス」「5 幼児ニ対シテハ決シテ説教ヲスベカラズ」「6 目ノ使ヒ方ニ注意……目ハ情愛ヲ表ハス事モ怒リヲ示ス事モ喜ビ悲シミヲ表ハス事モ得ル故ニヨク用ヒ常ニ全体ヲ見渡ス様心掛クベシ」「7 表情ニ注意ス……腰ヨリ下ヲ使ハヌ方ヨシ。偽ノ表情ハナスベカラズ」「8 自分ノ席ニ正シク座シテ成ルベク其場ヨリ離ルベカラズ」とある。

種類としては、「1 母ト子ノ繪ノ話」「2 特別ノ日ノ話」が「イ 祝日……四方拝 紀元節 天長節 春季皇霊祭 神武天皇祭 地久節 明治天皇祭 秋季皇霊祭 神嘗祭 新嘗祭」「ロ 記念日……創立記念日 陸海空記念日」「ハ 節句……三月ノ桃ノ節句（雛祭） 五月ノ端午ノ祭」とあり、「3 天象ノ話」「4 動植物ノ話」「5 雑」とあり、「イ 鉱物ノ話」「ロ 歴史ノ話」「ハ 地理ノ話」「ニ 玩具ノ話」「ホ 物語」「ヘ 建物ノ話」「ト 交通機関ノ話……汽車 電車 自動車 人力車 自転車 舟 駕籠 馬車 飛行機 エレベーター」とある。

以上のように、竹中幼稚園での会集の目的と概要を見てきたわけであるが、そこには祈祷と讃美歌というキリスト教幼稚園の特徴が見て取れる。大正期のキリスト教幼稚園の特徴について村山貞雄は、「教育ニ関スル勅語」によって教育の目的を厳格に定められていた中であって異教の神の存在を幼児に信じさせようとした点にあるとしている（日本保育学会1969: 248）。

「すなわち『若き日になんじの造り主をおぼえよ』というイエス・キリストの言葉に従い、幼児期からの信仰の生活にみちびき入れようとして行われた努力は、『礼拝』や『聖書のお話』となったのである。」（日本保育学会1969: 248）

さらにその特徴を村山に依拠して要約すると次のようになる。

教育方法の特徴としては、

①キリスト教そのものが人の性を悪とする宗教観を持つことから、キリスト教幼稚園では、人間の自由な本性の伸長よりも、目的的なしつけをおもんじる傾向があったこと（日本保育学会1969: 249）。

②外国人が新しい教育方法を取り入れ、わが国の幼稚園に新風を吹きこんだが、同時にキリスト教的な規律をおもんじる教育をしており、それがキリスト教幼稚園の教育方法の特色であったこと（日本保育学会1969: 250）。

保育内容の特徴としては、

③当時の普通の幼稚園が、国によって強く規制された教育目的にはふれず、その精力の大部分を教育方法に向けていたのに対して、キリスト教幼稚園では、むしろ旧式とさえ思われる保育の内容を守っているところが少なくなかったこと（日本保育学会1969: 248-249）。

④キリスト教幼稚園の保育内容は、世俗の幼稚園とだいたい同じであった。しかし聖日礼拝を守ることと、聖書のお話を聞かせることが厳格に行われており、この二点が一般の幼稚園と異なっていたこと（日本保育学会1969:250）。

以上のような、しつけやキリスト教的な規律を重んじる教育というようなものが、当時の竹中幼稚園においてどの程度行われていたのかについては、現時点では明確に提示できないが、祈祷の注意の「5 他ノ子供ニ邪魔ニナラ又範圍ナラバ目ヲ開ケタリ又落付カザル子供アリテモ其ママニナシ置ク方ヨシ。強イテ目ヲ閉ジサセタリ静カニサスハ良カラズ。若シ餘リ迷惑ニナル時ハ他ノ室ニ連レ行キテ静カニナルマデ置ク」からすると、規範的なことや統制的な方法とは一定の距離を置こうとしていたことが考えられる。

さらに村山は、基督教保育連盟編（1941）『日本基督教幼稚園史』の中で、広瀬浜子による「基督教幼稚園の礼拝」の一部を次のように引用し、大正期のキリスト教幼稚園での「お祈り」や「聖書のお話」が凡そ、以下のような形で行われていたのではないかとしている。

○礼拝は一日の主要行事

保育案の中で毎日欠かさずしかも一日の中で一番子供の心意状態の新鮮な時間をねらつてまもられて来たのは礼拝の時間であります。地方に依り、指導者によつて多少の相違がありますが、大体次の様な形をとつてゐました。

（一）一日の最初に入れる場合

朝の輪を作らせる（静かなマーチを弾くところもある）

主の祈を皆で唱へる

讃美歌を一つか二つ歌ふ

短い聖句の暗誦をする

静かな奏楽をきく

短いお祈を皆んなで唱へる（先生が祈ることもある）（この後で朝の挨拶の歌を歌つて聖書のお話をきく）以上約四十分間

（二）礼拝を遊びや手工の後にする場合

（感覚的な運動の終つた後の方が、心理的にも身体的にも静座して受身になり易いと云ふ論拠をもつてゐる）

午前十時頃から輪に坐らせて、聖書のお話をした後で讃美歌を歌ひお祈をさせる

○聖書のお話と食前のお祈

聖書のお話は大体礼拝の前後にあり、所によつては毎日、所によつては週に一回、月曜日か土曜日の朝牧師先生を招いて話してもらつたところもあります。又週に一回か二回幼

稚園の終る前の半時間を聖書のお話とお歌との為に用いた所もあります（日本保育学会 1969: 251-252）。

このような解釈からすると、竹中幼稚園は1日の最初に会集を行い、その中にお祈りと讃美歌を入れていたといえるが、少なくとも1925年（大正14年）の4～10月の『幼稚園日記』や『會集』の中には、聖書の話の記載が見当たらない。

4. 律動、遊戯、自由遊び、仕事（手技、恩物）について

竹中幼稚園で律動は、ほぼ毎日行われていたが、詳細については現時点で確認できていない。通常、ピアノを弾いて律動を行っており、主に河野淑子が担当していた。竹中みつはピアノを弾くのが少なくとも大正期においては得意ではなかったようである。1925年（大正14年）5月15日（金）の幼稚園日記には次のようにある。

「河野さんが休みで自分がピアノを弾くことになり一寸困った。律動を止めて自由遊びをする。」

水野浩志によれば、律動は大正期に土川五郎が提唱したもので、子どもにふさわしいリズムカルな歌曲に動作をふりつけた律動遊戯と、童謡や幼児向の歌詞に動作をふりつけた表情遊技からなる。遊戯を通して楽しみながら身体を練磨し、音楽と表現により精神を高からしめることを意図していた。自ら創作した律動遊戯を東京麹町小学校および同附属幼稚園児童に教え、大正6年に文部省が夏季保育講習会の遊戯指導者として、土川に委嘱し、以後約10年間これを務めることで全国に普及したものだ（日本保育学会1969: 100-102）。土川の活動は、大正期の児童中心主義的な新教育運動や、作家、画家、詩人、作曲家、舞踊家による芸術教育運動が興った時代の中で、倉橋惣三が編集顧問だった月刊童謡雑誌『コドモノクニ』の毎号の主要作品に振付解説を行っていた（日本保育学会1969: 106）。

竹中幼稚園での遊戯は、ほぼ毎日行われていた。詳細については現時点で確認できていないが当時の記録には次のようにある。

「お遊戯や歌は、無邪気で、清新で、快活であるようにと心掛けて居りますが、それと共に輕薄に下品に淺つぽく、ならぬ様に味はひの深い物を、選ぶ事に注意致して居ります。」
（竹中幼稚園1925: 4）

このように律動と遊戯は、竹中幼稚園の毎日の活動の中に位置づけられていた。また、自由遊びについては次のようにある。

「寒かろうと、暑かろうと、一切おかまいなしに、自由時間には、運動場で、ブランコ、
 迂り臺、毬投げなどに、我を忘れて、打興じて居る有様、世にかくも清い尊い状態が他に
 ありませうか。少々の争ひは直に止んで、涙の跡をぬぐひもせず、肩を組合つてホ、笑ん
 で居る姿は、實に此世ながらの天国でキリストのお言葉も、さこそうなづかれます。」(竹
 中幼稚園1925: 5)

竹中幼稚園での自由遊びは、1925年(大正14年)の幼稚園日記をみると、日々の記録に「自
 由遊び」との記載が多く見られ、雨天でない場合、外で遊ぶことが日常的であった。例えば、
 幼稚園日記によれば、新学期がスタートした頃の4月14日(火)には自由時間に外で遊ぶと
 あり、逆の記載として4月23日(木)には子どもたちを室内で遊ばせるのに骨が折れるとある。
 5月1日(金)にはグランドへ行って花を摘むとある。

園長の竹中みつは、竹中幼稚園開設40周年の際に、開設当初である1923年(大正12年)3
 月を振り返り、当時のことを次のように述べている。

「翌年三月この広い新会堂に移りました時は全く私共も子供達も嬉しくてのびのびと走り
 廻りました。見渡す限り広い草原で中央病院と元の市役所の他には何ら建物はなく、ここ
 から汽車の通るのが見え、何所まで走っても何の心配もありませんでした。子供達にとっ
 て自然物が何よりの遊び道具でした。クローバーの毛氈の上に座って首飾りを編んだり、
 花束をつくったり、草花を集めておまゝごとをしり又は原っぱで風揚げしたり、相撲を取っ
 たり全く子供の天国さながらでございました。」(竹中幼稚園1962: 13)

このように竹中幼稚園では、隣接する原っぱという空間で遊ぶことが大切な内容として位置
 づけられていた。

仕事(手技、恩物)についてであるが、大正期の竹中幼稚園では第1～第10恩物が備えら
 れており、1925年(大正14年)4月～10月の幼稚園日記をみると、第1、第3、第4、第5
 恩物が多く使われている。この恩物については稿を改めて整理することにしたい。

手技については、1925年(大正14年)の幼稚園日記によれば、①穴開け、②仕事、③繪畫、
 ④組紙、組板、⑤織紙、⑥折紙、⑦切紙、⑧豆細工、⑨ボール紙細工、⑩砂、粘土となってい
 る。(この番号については、本稿において分かりやすく整理するために筆者が記したものである)

村山貞雄によれば、大正期の手技は、^{なら}排べ方、^{たた}繋ぎ方、摺み方、積み方が多かった(日本保
 育学会1969: 93)。

清原みさ子によれば、1921年(大正10年)の岡山市立幼稚園における手技は、繋方、豆細工、
 粘土、紙細工、糊細工、自然物、糸細工の7種類であった(清原2014: 291)。また清原は、『幼
 児教育法』の著者である和田実による「保育材料予定細目表」の中から手技に関する項目を整
 理している。それによれば手技に関する項目は、貼り紙、切り抜、厚紙細工、折り紙、組み紙、
 つなぎ方、縫取、粘土細工、豆細工となっている(清原2014: 293-294)。

このようなところから比較すると、竹中幼稚園の手技は、①穴開け、③繪畫に特性があることが考えられるが、手技の詳細についても稿を改めて整理することにしたい。

おわりに

本稿では、竹中幼稚園の胎動をさらに詳細に描き、竹中幼稚園の保育内容であった会集、律動、遊戯、自由遊び、仕事（手技、恩物）を再現し、会集についてはやや詳細に再現した。そしてこれらを、大正期の幼稚園史の流れの中に位置づけることを多少であるが試みた。

次稿では、会集、手技、恩物についてさらに詳細に再現すること、それらが大正期から昭和初期の幼稚園史に位置づけることにしたい。

謝辞

竹中みつ氏および竹中幼稚園の資料を研究として使用するにあたり、倉敷教会の中井大介牧師、竹中幼稚園の小山光子園長から、専属的な許可とご依頼を戴きました。資料の撮影においては、帝京科学大学の田口直子氏から多大なご協力を戴きました。資料の検討においては、帝京科学大学の田口直子氏、神谷純子氏、福山大学の藤原美樹氏から多大なご協力を戴きました。

お世話になりました皆様に心から感謝の気持ちを述べさせていただきます。

注

- (1) 竹中光子が本名であるが、存命中、二つの名前を使用していることから、本稿では竹中みつと記載する。但し、本人が著者として竹中光子もしくは竹中みつと記載したものについては、その通りの表記とする。

引用文献・参考文献

- 清原みさ子（2014）『手技の歴史 フレーベルの「恩物」と「作業」の受容とその後の理論的、実践的展開』新読書社
- 高月教恵（2010）『日本における保育実践史研究―大正デモクラシー期を中心に―』御茶の水書房
- 竹中みつ（1924）『個人日記』
- 竹中みつ（1925）『幼稚園日記』
- 竹中光子（年代不明）『會集』
- 竹中幼稚園（1925）『竹中幼稚園の葉』大正十四年四月
- 竹中幼稚園（1932）『十周年記念 竹中幼稚園の葉』昭和七年十一月二十二日
- 竹中幼稚園（1962）『創立四十周年記念 竹中幼稚園のしおり』
- 日本保育学会（1969）『日本幼児保育史 第三巻』フレーベル館

（受理日 2020年1月8日）